

花き

平年の梅雨明けは7月19日頃となります。梅雨明け後は強烈な日差しと気温の上昇となり、花にとっても施設内で仕事をする人にとっても過酷な環境となります。天窗や棲窓、肩部分を開けて施設内の熱気を抜くなど換気の徹底を図ってください。

また、施設内への風通しを妨げるようなものがないか点検するなど、周辺環境改善をしておきましょう。

1 トルコギキョウ抑制作型（9～10月切り花）

（1）ほ場準備

この作型は定植から収穫までの期間が短く、品種によっては3カ月程度で出荷されるため、早期から肥料が十分吸収できる状態にすることが、ボリューム確保や品質向上を図る上で重要となります。

トルコギキョウは、かん水を多く必要とする品目であり、特に夏場は通常よりかん水が多くなるため、過剰な水分が滞水しない、物理性のよい土づくりが重要となります。物理性の改善として、深耕による作土層の確保と良質な有機物施用が基本となります。

堆肥や基肥施用し耕うん後、畝立てを行い、定植までに地温を下げる目的で遮光し、適宜散水を行います。

（2）生育初期の管理

1) かん水管理

7月上旬～8月上旬の定植は高温、強日射の影響により、定植直後から活着までは水分ストレスを受けやすい時期です。水分管理には細心の注意を払い、施設内の気温の上昇と直射日光による苗からの蒸散を防ぐことで活着の促進が図られます。

2) 短日処理

短日処理の方法は、定植直後から9時間日長となるよう100%遮光の資材を用いて実施します。短日処理の期間は、定植時期や品種の早晩性等によって異なりますが、7月定植では2～4週間程度とします。8月以降の短日処理は開花が遅れるため、地域によっては短日処理を行わないか、実施しても2週間程度の処理期間とします。



写真1 トルコギキョウ短日処理の様子

3) 高温対策

7月の梅雨明け以降は、高温、強日射となり、葉先枯れや生育促進による短茎開花等の品

質低下が問題となります。7月から8月の定植は、高温の影響を受けるため定植前から施設内の温度や地温を下げる対策が必要です。

寒冷紗等で施設内の遮光や天窗、側窓、妻面を開放してできるだけ外気温に近づけます。遮光率は40%程度がよく、50%以上の遮光率の高い遮光を長期間被覆した場合、茎の軟弱化や花蕾数、分枝数の減少などの品質低下につながるので注意します。



写真2 内張りカーテンによる葉焼け対策

2 ストック無加温秋切り作型（10月～12月）

7月下旬から8月上旬には種し、無加温で10月～12月にかけて切り花する作型です。高温期の育苗と定植となるので、きめ細かな管理が必要となります。は種期が早すぎると早期開花による草丈不足や分枝の発生、花飛びなどが発生しやすくなります。また、遅すぎると年内に開花しないものが出たり、低温によって採花率が低下します。

直まき栽培の場合は、開花期が前進するため、移植栽培よりもは種期を1週間程度遅らせては種します。

（1）移植栽培のは種

a 当たりの定植数は4,400本となります。発芽率、生育不良、八重鑑別を考慮すると定植株数の2.5～3倍の種子が必要です。10mlの種子数は2,000～2,500粒であるため、50～60mlが必要です。は種は、深めの育苗箱を用いて、1箱当たり2ml（約400～500粒）を条播します。条間5～6cm、深さ5mm程度のまき溝をつけは種間隔は5mm程度になるように均一には種します。は種後は種子が見えない程度に覆土します。は種前に用土を十分に吸水させておき、細目のノズルでたっぷりかん水後、発芽までは新聞紙をかけます。

（2）発芽後の管理

発芽後は、直ちに新聞紙を外し、徒長を防ぎます。八重咲き率を高めるには、かん水を均一にして発芽を斉一に揃えることがポイントです。発芽揃いまでは土壌表面を乾燥させないよう遮光資材を用いて管理します。かん水は本葉1枚頃までは、多めにし、徐々にかん水量を控えていきます。

（3）八重鑑別

八重鑑別は、発芽揃期、子葉展開期、定植前の3回に分けて行い、特に子葉展開期を重点に行います。

- ① 発芽揃期は、遅く発芽したものと奇形葉を間引く。
- ② 子葉展開期は、子葉が小さく、丸い、葉色が濃い個体を間引く。
- ③ 定植前は、子葉が短く子葉の幅が狭いものを間引く